

ワンピースマン ～バトルランナー～

Jack_amano

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ワンパンマン ～日常ショートショート～ 短編、『KINGの苦悩』で出てきた、

『秋の特番』ヒーロー協会提携S級3vsA・B・C級30サバイバルゲーム”勝つのはどっちだ?!”の続き。

サバゲーで、S級3人を率いる事になってしまったキングと、A・

B・C級30人を率いるアマイマスクの対決編。

前編

目次

前編

「最初に言っておくが、俺としてはこの企画自体反対だ」

なるべく低く押し出した台詞とは裏腹に、正直な俺の心臓は、周囲に聞こえるほどの大きな鼓動を打ち出している。

ここはヒーロー協会小会議室。

某テレビ局がヒーロー協会広告塔『アマイマスク』を通して持ち込んだ、S級3人 v s A・B・C級30人、サバイバルゲームの打ち合わせ会場だ。

目の前には神経質そうに組んだ指を動かすアマイマスク氏、俺の横には、眉間にシワをよせ、不機嫌さを隠しもしない鬼サイボーグ氏と、黙って事の成り行きを見守っている顔色の悪い男、ゾンビマン氏。

”キング”なんて御大層なヒーローネームもらっちゃてるクセに、実はヨワヨワの単なるオタクゲーマーな一般市民、ハリボテの俺とは違い、三人とも本当の実力者。こうやって顔を合わせただけで、俺のノミの心臓はバクバク音をたてている。

「凄い音だねキング。戦闘態勢かい？ そんなに僕を警戒しているの？ 僕はただ、上手いかなかった怪人退治の埋め合わせとして被害者支援の為の寄付金集めに協力するのはヒーロー協会に属している者として当然の事だと言ってるんだけど？」

違う！ 勘違いだから！ あんまり煩いからキングエンジンなんて言われちゃってるけど、これ、実は心意性の不整脈だから！ アマイマスク氏に攻撃なんてする気なんて全くないから!!

「キングの言う事にも一理ある。昨今、怪人の出現率は鰻上りだ。この忙しい時に人員を33人も半日間拘束するのは得策じゃないだろう」

「烏合の衆なぞ、いくらいたって無意味だろ？ 今回のイベントバトル、僕としてはペイント弾なんて生ぬるいことはせず、手加減せずに本気で戦ってもらいたいくらいだ。」

ケガなんて自業自得だろ？ 自分が弱いからするんじゃないか。一般人と変わらない、カスのようなヒーローなど見るに堪えないね。

美しくない。僕としては、これを機に身の程を知ってもらって自ら辞めてもらいたいくらいだ」

鼻をならし、不機嫌そうにゾンビマン氏に反論するアマイマスク氏。

ああそうだ。彼は「海人族戦」でも「宇宙船襲来戦」でも、このスタンスでS級ヒーロー達の反感を買っていた。

「だが、彼らがいるから、我々はパトロールやレベル狼クラスの怪人に時間を取られずにすんでるんじゃないか？」

フォローをありがとうゾンビマン氏！

無限コンティニューなんてチートな技スキルを持つてるのに、君は本当に常識人だ！

「大体、バトルフィールドが山中なのもどうかと思うぞ。高レベルの怪人が出た場合、駆け付けるのに時間が掛かる」

そうそう、こんな企画、中止の方向に持ってっちゃって！

「それなら・・・どうでしょう？」

今まで忘れ去られていた番組プロデューサーが嬉しそうに手を擦り合わせながら言った。

「皆さん、腕に覚えがある方ばかりですし、怪人出現のホットスポットと呼ばれる、Z市無人街で行っては——」

えっ?! ちょっと待って！ それって怪人出現したら、自分でやつけるって事だよな?!

「ああ、それは良いね。そこなら何があっても周りを気にせずに処理できるし、素早くへりでヒーローを派遣できる」

何かって、一体ナニ!?! アマイマスク氏の中ではナニが想定されるの?!

「まあ・・・妥協点だな」

頷くゾンビマン氏。

ちよつと！ ちよつと待ってよ!!

俺の心の叫びは、ジェノス氏の「俺と先生の家の周りで騒がれるのは迷惑だ」という台詞と共に無視された。

Z市無人街は大きく分けて三つの地域で構成されている。

一つは、高速道路と外に隣接している… サイタマ氏とジェノス氏が住んでる昔からの住宅街。ここは無人だが、比較的荒れていない。

二つ目は、川沿い… 閉鎖された競艇場と河川敷ゴルフ場に隣接している、振興開発を狙って比較的新しく作られた準住宅街。

三つめは… 荒廃の進んでいる工業地帯。政府の方針で市街地から大小様々な工場を集めたものの、そこを資源入手などの目的で怪人や武装集団に狙われて破壊された一帯だ。

勿論、無人街と言うからには、どこにも人は住んでない。

サイタマ氏とジェノス氏以外は。

…：本当に二人ともよくこんな所に住んでられるよね。俺はムリ！ 絶対!! 危険地帯以前に、まず100m圏内にコンビニがない時点でアウトだし！

指定されたS級本拠地を望む、水門の上でライフルを組み立てていく——— 今、大規模工場内にある俺達の陣営のフラグポイントには誰もいない。

開始早々、ジェノス氏に正面入口以外の窓やドアを塞いでもらい、二人には指定したポイントに向かってもらったのだ。

ジャストな位置にライフルを据えると、俺はダミーシートを被り、腹ばいになった。

今回のゲーム、ルールはこうだ。

S級チーム、A・B・C級混合チームの各々が陣営を持ち、2時間以内に敵地のフラッグを奪えば勝ち。

タイムアウトの場合、敵を倒して得たポイント（A・B・C級1人1点、S級1人10点）と、怪人に捕まって逃げ遅れた”民間人”設定を助けたポイントを合算して多い方の勝ち。勿論、民間人が何処にいるのかは大まかな事しか教えられてない。（実はジェノス氏の生体反応探査で、競艇場にいるともうわかっちゃってるのは内緒だ）

民間人を助けるつもりなら終了間際でいい。俺達は三人しかいないのに、狭い場所で、一度に大勢の敵を相手にするのは割りに合わない

い。それよりも罫を仕掛けてエサにした方が得策だろう。

相手のリーダーはアマイマスク氏だ。

『一般人と変わらないカスのようなヒーローなど見るに堪えないね。美しくない。僕としてはこれを機に身の程を知って自ら辞めてもらいたいくらいだ』なあんて言ってた彼の性格から、突出した戦闘力を持った彼が先陣切って攻めてくる事はまずあり得ない。

彼にとって、実力の伴わないA・B・C級組が不様な姿をメディアに晒して淘汰さらされるのは願ってもない事の筈だし、日頃知ることの出来ないS級組（特に謎なこの俺）の実力を見てみたいと思ってる筈だ。

だからきつと初っぱなは仲間任せ、自分は見晴らしのいい場所から戦況を見守っているはず。

とすると——俺がいるみたいな高台にいくだろう。一人だけで。

つまり、ジェノス氏からタブレットに送られてくる生体反応で、一つだけ外れて動かない点がアマイマスク氏だ。

ザツとノイズのような音の後にインカムから入るジェノス氏の声。『G（ジェノス）からK（キング）へ、敵は幾つかのグループに別れた。一番大きなグループは予定通りヒントを追って競艇場方面に向かっている』

やっぱりな。民間人救出はゲームの見せ場だ。カメラも設置数が多いだろう。名声の欲しい奴等は積極的に市民救出を狙っていく筈だ。

「KからGへ、了解。予定通り頼む。何か変更があれば連絡を。Z（ゾンビマン）、B級のスメルマスターも参戦してるから、くれぐれも煙草は自重してくれ」

『あゝ、くそ！ 了解。それ聞いてたら引き受けなかつたよ』

ゴメン、ゾンビマン氏！ 会議室の近くに喫煙所作る案、俺からも押しとくから!!

今回、ジェノス氏のやる気は臨界点を越えている。

日頃贅沢しないサイタマ氏に『副賞の焼肉食べ放題、ヨロシクな』な

んて言われちゃったから尚更だ。何たって彼が大技を繰り出す焼却砲を、この日のためだけにペイント弾仕様のマシンガンに改造してきたくらいだし……………

ジェノス氏—— おそろしい子！

それ、絶対に焼肉食べ放題より高くついでるよね!?

『Zからアー(全員)、本トラップにタンクトップ兄弟が喰いついた』
本トラップ。

それはゲーム”メタル〇ア”に倣った、エロ本を仕掛けておいて足を止めさせると言う由緒正しいトラップだ。

でも勿論テレビに映る事も考え、倫理面を考えてもっと効率のいい本にした。

それは—— 女性雑誌『a○an』気になるヒーロー特集！ ”今、抱かれないヒーローは誰?!”だ!!

女性から見た自分の評価は気になる。けど、社会的な目を気にして本を買えないヒーローなら絶対食いつくはず! ……と思ったらやっぱり釣れたらしい。

ふっ、悲しいけど… 戦争なのよね、これ。

『代われゾンビ! 俺が殺る!!』

え?! ちよつとジェノス氏?! 今、絶対、殺るって言ったよね?!

『あ、おい! そこで俺の名を切るな!!』

あ、ゾンビマン氏、想定外の持ち場交換よりも、躊躇ちゆうちよするのはそなんんだ? あんまり変わらない気もするけど…… ゾンビマンなら辛うじて人だもんねえ? やっぱり”かゆうま”扱いは嫌だったんだ?

しかし、まいった。ジェノス氏とあの二人とのエンゲージを想定してなかったよ……!

ジェノス氏は、タンクトップ兄弟を目の敵にしてたんだった。命令違反は、軍なら銃殺刑になってもおかしくないんだからね! ジェノス氏?!

「Z、Gのフォローよろ! G、周囲50メートル圏内に敵がいたら、攻撃後、直ぐ様離脱。撮影しているドローンを警戒、頭上を旋回され

て、敵に居場所を悟られる様な事になるな！」

S級はジェノス氏も含めて、どうも回避行動を疎かにしている節がある。まあ…みんなチートキャラで、少々攻撃を喰らったってダメージ薄いから、押せ押せになるんだろうけど… こういうルールがあるゲームでは致命的だ。

『了解！』

瓦礫を走る音、散発的に入るライフル射撃の音、ヘッドフォンから入る向こうの音は混迷を極めている。

大丈夫かなあ〜 ジェノス氏。あんなにアーマークラス高いのに、彼でさえ、頭とボディに一発でもペイント弾喰らったら死亡判定だからなあ〜 開始そうそう彼に抜けられたらかなり痛い。

事の成り行きにドキドキしながら、自分のスコープに入ってきた一団を見る。

高い塀に囲まれた俺達の拠点の出入り口前には、一見、扉から、遮蔽しゃへいになるように見えるよう、コンテナが置いてある。これも勿論ジェノス氏に置いてもらった。こんなモノがあれば、どうしたって隠れたいのが人情つてもものだ。

でもこつちからはバレバレなんだよね〜 むふっ。

B級グループのワイルドボーン、毘天狗、スメルマスターに紅一点こういってんのピンクホーネットか。
予め見ておいたヒーローこうりやくほん大全で情報を収集しておいたから、相手の属性はバッチリだ。

この場合、最初に狙うのは頭脳派でトラップマスターの毘天狗だね。そして次は素早いピンクホーネット。ワイルドボーンは脳筋だから最後だな。

よし、ひじを左わきから離さない心がまえで、やや内角をねらい、えぐりこむようにして…………… 撃つべし、撃つべし、撃つべし、撃つべし!!

毘天狗をやられて、何処からの攻撃か分からずあたふたしてる間に続けざまに連射する。

フツ、楽勝。この場所が敵にバレちゃう前に、もう少し戦力削れな

いかな。

『ZからKへ！　こちら制圧完了。被害なし。鬼サイボーグの奴、エゲツないぞ！　一方的にフルボッコだ、あいつ等に何か恨みでもあるのか??』

『安心しろ。峰打ちだ』

『鋼鉄の手足に、峰打ちもクソもあるかよ!!』

あく、ご愁傷様タンクトップ兄弟。

ほんとブレないなあジェノス氏は。こんな時でも、サイタマ氏を貶めようとした奴には制裁発動かあ。俺ももうちよつと手加減してサイタマ氏と対戦ゲームしないと闇討ちされちゃうかも。

「・・・Kからaーへ、こちらも4人排除した。引き続きそちらを頼む」

『本当か？　開始30分で半数越え・・・こりやあイケるかもしれないな』

「まだアマイマスクもいる。引き続き警戒を」

『了解』

まだアマイマスクもステインガーも残ってる。フブキ組とアトミック侍の師弟たちが辞退したとは言え、群れるB・C級よりも個々で動くA級が残っているのが心配だ。

トラップは、あくまで雑魚（ゴメン!!C・B級！　俺にだけは言われたくないよね?!）の数を減らすためのものだ。

ダンボールトラップ（いかにも人が潜んでいそうな怪しいダンボールを配置して、警戒と足止めを誘う。わざわざこのために、萌えダンボールを俺の家から持ってきた）にC級の十字キーとその相方のサスペンダーが引っ掛つたのは、ゲーム好きの二人なら絶対に足を止めると思っただからだし（勿論、「こうかはばつぐんだ!」遠慮なく射撃した）

河川ゴルフコースに仕掛けた投網トラップには、思った通りC級連合が引っ掛つた。

あとは競艇場の入り口に仕掛けたトラップに、民間人救出を目指す目立ちたがり屋の連中を誘い込めれば、かなり削れるだろう。

残ったA級は……　一対一なら二人とも勝てるだろう。俺には到

底無理だけど。

でも、出来れば作戦通り——ゾンビマン氏が銃で気を引いて、ジェノス氏が仕掛けるのが手堅くて無理がない。

……問題はアマイマスク氏だな。彼は絶対に俺を狙ってくるだろう。

どうしようかなあ〜 実質、彼はS級並みの実力だし、もともと容赦がない人だからなあ。

俺はゲーマーなだけの一般市民で、戦闘力は皆無だし、大体、彼にライフルが効くのかな？

…なんか気配察知して、サイヤ人の如く、紙一重で避けられそうな気がする。

ここは秘かに考えていた通り…… 仲間の足を引つ張らない為にも、ある程度ポイント稼いだら、俺だけ隠れてタイムアップ狙った方がいいだろうな。

………情けなくて二人には絶対対に、言えないけど。

ごめん！ ごめんよ〜〜二人とも！ 俺がゲームに引き込んだのに、一人だけ逃げる気で!!

お、C級の赤マフとB級のダークネスブレイド発見！ どっちも近接攻撃型だ。撃っちゃえ。

倒れた二人に、スタツフTシャツを着た頭の眩しい男が大八車を引いて走り寄る。

サイタマ氏だ。そう言えば、現地アドバイザーとして、パトロールと落ちた奴のキャンプ地送りのバイトを引き受けたって言ったな。ロケ弁ももらえるって喜んでたっけ。

……脱落者、わざわざ台車に乗せて連行するのってどうなのかな？ やっぱりこれって晒し者にするためか??

ぽんぽんと大八車に人を積むサイタマ氏の姿を、容赦なく撮影用ドローンが記録していく。

うわ〜〜っ あれ、テレビ放送されたらかなりへこむよね?!

モンハンでインターネットクエストにヘルプで入ったのに、一人で3オチしちやってフレンドリストはじかれちゃうよりクるかも!

まあ、俺は体験したことないけどさ。

俺がスコープで見ているのを知ってか知らずか、サイタマ氏は台車の軛くびきに手をかけた。

ふふっ 撮影されてるっていうのに変わらないなあサイタマ氏は。こんな時ぐらい、ゆる〜いダルダルな顔してないで、スイッチ入ったカツコイイ顔すればいいのに。

この距離から——サイタマ氏を狙撃したらどうなるかな？

まあ、まずかわ躲されるだろう。

でも……一瞬でも、本気の時の、あの真面目な顔になるのかな？ ははっ！ チョット試してみたい気もするね。

突然、サイタマ氏が俺の方を振り仰いだ。あれ？ 今、スコープ越しに目が合った?!

いや、ないない。ここからあそこまで600ヤード近く離れてるんだし。

サイタマ氏は何事もなかったように前を向くと… カメラドロローンを引き連れて、すごいスピードで荷車を引っ張っていった。

A級のフォルテを排除したとゾンビマンから連絡が入ったのはそのすぐ後だ。

彼が言うには、フォルテがヘッドフォンから流れる曲に合わせて、必殺技を繰り出すための前行動で踊っていたところを、容赦なく撃つたらしい。

ゾンビマン氏は正しい。正しいよ。……正しいけど、相手の事を考えると涙をそそる。

そうだよね〜 口上述べてる時や必殺技の前振りしてる時は攻撃しないって言うのは、物語だけのお決まりだよね〜。わかっている。わかってはいるけどさあ、自分のお気に入りの特撮でそれをやられたらと思うと泣けてくる。

ああ、現実はきびしいなあ。

再度タブレットを確認——こっちの光点の群生はテレ

ビクルーのいるキャンプ地の方だし、こっちの方は競艇場だ。

そうなると、その近くにバラけた二つの点はジェノス氏にゾンビマン氏、そっちに高速で向かうこの点が————んん？　どう見ても川の中にある、この光点はなんだろう？　戦略的にも、バトルフィールド外のここに人員を配置する意味がないけど？

「おい、キング」

「うわあああああ!!」

突然、掛けられた声に、思わず飛び跳ねる。

振り向くと、さつき荷車を猛スピードで引いてった筈のサイタマ氏が立っていた。

おいサイタマ氏！　ここ、水門の上だからね!?　22階の俺の家にジャンプでバルコニーから入ってくる人には簡単な事なんだろうけど!!

あゝ、心臓が苦しいくらいドキドキしてる！　…………やべえ今のでチョットちびっちゃった。

気付かないでくれよ　サイタマ氏……。

「カッコいいなそれ。キングの銃か？」

「あ、うん。童帝君に頼んだんだ」

俺の持ってたモデルガンじゃいくら手をいれたとはいえ、所詮おもちゃだ。飛距離を考えると心もとない。なんとかならないか？　と、童帝君に相談したら、喜んでこれを作ってくれた。それも、もの凄い笑顔で。

まるで、未来から来た青いネコ型ロボットの様にいとも簡単に持ち出してきて————　対価を尋ねたら、お返しにゲームのレベル上げを手伝ってくれればいいと言われたけど……　そんな簡単な事ですんで申し訳ないくらいだった。

「怪人の方はどう？」

「今日はまだ見てねえな。ま、今日に備えて念入りに潰しておいたし」

あゝ、やっぱりいつもは念入りに潰さなきゃいけないくらい出るんだ？　俺、けっこうサイタマ氏の家遊びに行ってたけど、よく今

まで無事だったなあ。

周囲に生体反応のシグナルがない事を確かめて、俺は背後にある大きな川に向き直った。勿論、一つだけある未確認アンノウンの生体反応を肉眼で確認するためだ。

うーん、遠すぎる。スコープ通しても判らないな。

「なに?」

「いや、川の中央に一つだけ生体反応があるんだけどさ、なんだか判らないんだ」

ゲームにあわせて、人より小さいものは弾くように設定したとジェノス氏は言っていた。つまり、普通の魚や鳥はあり得ないわけだ。

「どっち?」

「競艇場のこっち側」

うん、これは双眼鏡でも判らないな。

「・・・別に水面には何にもいねえぞ。波は立ってるから、何かいるんだろうけどな」

「え? 見えるの?」

「えっ?? 見えないの? キング、ゲームのし過ぎで視力落ちてんじゃね?」

「いやいや、普通この距離は見えないでしょ。サイタマ氏、すごいのはパワーだけじゃないんだね。・・・アオウオとかかなあ・・・最近はずかしい魚とかいるって言うし・・・」

大体、どのサイズまで普通で、どのサイズからが怪物のくくりなのかなあ? 何にも被害がないんだったらほっとくべきだな。うん。

「デカイ魚だったら、夕飯の足しになるな」

うれしそうだね? サイタマ氏?? 怪人食べたことあるって言うってたもんね。今度から、夕飯ご馳走になる時は肉の種類を聞く事にするよ。

「サイタマ氏、バイト中でしょ、狩なんてしてる暇ないよね?」

「だな。しかしすげえドローンの数だよな。誰を追ってるんだ?」

えっ? ドローンが追ってる??

「ドローンが見えるの? サイタマ氏!」

「ああ、結構な数が、スピード上げて競艇場の方いつてるぞ」

アマイマスク氏だ！ 彼と同じ芸能事務所に所属しているアイドル上がりの新人ヒーローユニット”微炭酸BOYS”が消えてる今、何台もカメラが追うのは彼しかない!!

「Kからa11、アマイマスク氏が高速で向かっている！ Zは反射光を利用、玄関大ガラスを背に銃撃準備！ Gは背後に回り込め!!」
『了解!』

………光点がみんな競艇場の方に向かってる… ドローンはみんなアマイマスク氏に付いていった。だとすれば、定点カメラさえ気を付ければ――

「サイタマ氏、俺、移動するよ」

「おう、がんばれ。俺も仕事もどるわ」

サイタマ氏は軽々と飛び降りると――競艇場の方に消えていった。
さてと、俺も行くか。

目指すは競艇場向こうの廃工場。体力のない俺が向かうにはちよつとばかり遠いが――必要最低限残して荷物をデボればイケるだろう。

俺は一段一段、足掛りを踏みしめて、アタックポイントを後にした。